様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６００３

研究課題名（和文）偶然性を契機とする人間形成論の探究―九鬼周造と西田幾多郎の比較研究を通じて

研究課題名（英文）The Study about Human Deveropment Based on the Theory of Contingency: Through the Comparative Study on Shuzo Kuki and Kitaro Nishida

研究代表者
古川　雄嗣（Furukawa, Yuji）

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：５０７５８４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、九鬼周造の特に偶然論および時間論に主軸を置き、それと西田幾多郎の哲学との比較をも念頭に置きながら、偶然性を契機とする人間形成の論理を探究したものである。特に顕著な成果として、後期九鬼哲学の「自然」概念の意義が明らかにされたことが挙げられる。九鬼の言う「自然」とは、道徳的実践としての「必然」が、その無窮の反復によって「習慣」となった状態を指している。ここに「精神」と「自然」との対立が止揚された理想的人間像が見出されるとともに、「習慣」概念のさらなる探究の必要が明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I consider the theory of human development based on the theory of contingency and time in the philosophy of Shuzo Kuki, at the same time, through comparing with the philosophy of Kitaro Nishida. The primary result is that we revealed the significance of the concept of ‘Nature’ in Kuki’s late philosophy. ‘Nature,’ in Kuki’s philosophy, means the state that the ‘Necessity’ as moral practice become to the ‘Habit’ through its endless reiteration. In this point, we found out the ideal image of human that is sublate ‘spirit’ and ‘nature,’ and recognized the necessity of further study about the concept of ‘Habit.’

研究分野：教育哲学

キーワード：偶然性　実存　道徳　人間形成　九鬼周造　西田幾多郎　時間論

１．研究開始当初の背景

（1）主として 1990 年代以降、教育哲学研究は、いわゆるポストモダニズムの影響の下、人間存在および人間形成における偶然的事象や非連続的経験の積極的意義を力説する傾向を生じて来た。たとえば今井康雄「ライフサイクルと時間意識」（『教育哲学研究』第 69 号、1994 年）や井谷信彦「「住まうこと」と世界の奥行き：0・F・ボルノウ「新しい庇護性」再考」（『教育哲学研究』第 98 号、2008 年）等は、0・F・ボルノウの教育哲学に対し、それは苦悩や危機といった生の非連続的経験を、結局は知恵や教訓といった生の連続性に回収しようとするものに過ぎないとの批判を差し向け、非連続的すなわち偶然的事象を偶然的事象のままに捉え、その人間形成論的意義を考察する必要を力説した。その他、たとえば盧珠妍「初期および後期ニーチェにおける「仮象」概念の比較検討：「美的なもの」の人間形成論的な意義再考のために」（『教育哲学研究』第 101 号、2010 年）や、平石晃樹「レヴィナスにおける苦しみをめぐる思考と人間形成への問い：「無益な苦しみ」を中心に」（『教育哲学研究』第 101 号、2010 年）等でも、やはり、美的経験や苦悩といった、生の連続性や有意味性に回収されない非連続的な経験の人間形成論的意義という問題が主題化されてきた。しかしながら、これら一連の諸研究では、ともすれば、人間の生における必然性の契機、すなわち連続性、有意味性、目的性、あるいは同一性といった契機が、ほとんどア・プリオリな批判の対象とされている感が否めず、それゆえにその意義が等閑視される危険性をも含んでいると考えられた。

実際、たとえば「生きる意味」の実現に焦点をおいたＶ・Ｅ・フランクルのロゴ・セラピーの理論と実践や、それに示唆を受けた諸々の教育・援助理論、あるいは村田久行「終末期がん患者のスピリチュアルペインとそのケア：アセスメントとケアのための概念枠組みの構築」（『緩和医療学』第 5 巻第 2 号、2003 年）をはじめとする、いわゆるスピリチュアル・ケアをめぐる諸研究等に目を転ずると、そこでほとんど常にと言ってよいほど問題となっているのは、生の無意味さや無目的さを、いかに有意味で目的的なものとして自覚する（させる）かという問題、すなわち、偶然的事象をいかに必然化するかという問題であることがわかる。必然性を排除し、偶然性や非連続性の積極的意義を説くのであれば、他方にあってこの「生きる意味」という問題、あるいはその喪失という意味でのニヒリズムの問題にいかに応答するのか。このような根本的な問いが、今日の教育哲学研究の動向には、なお残されていると考えられた。

（2）如上の研究動向を背景として、申請者はこれまで、九鬼周造の『偶然性の問題』（1935 年）を、彼の哲学全体を背景として正確に読解することを通じて、偶然性の存在論的構造を解明することを試み、その成果を『偶然と運命：九鬼周造の倫理学』（ナカニシヤ出版、2015 年）にまとめて公表した。ここで明らかになったことは、九鬼の哲学は、「偶然の必然化」と「必然の偶然化」の二契機によって動的に展開する世界と人間の生の構造を明らかにするものであること、そうして、そのつど与えられる偶然性を、主体の意志と行為とによってたえず必然性に転換しようとする無窮の道徳的実践を、彼は「運命」という概念で指し示しているということであった。単なる偶然性でも、単なる必然性でもなく、その両者を契機とする人間の生の動的構造を明らかにし、かつそれに立脚した実践哲学の展望を示しえた点に、本書の教育哲学的意義があったと言える。

（3）しかしながら、それと同時に、なお残された課題として浮上したのが、西田幾多郎の哲学との比較研究であった。九鬼が『偶然性の問題』の結論で示している「運命」の概念は、その 3 年前に西田が論文「私と汝」（1932 年）において主題化した「愛」の概念と酷似しており、おそらくそれを意識して示されたものであることが窺われる。すでに一連の西田研究において明らかにされているとおり、西田の言う「愛」は、彼がこの時期、強い関心を抱いていたカール・バルトやゴーガルテンといったキリスト教の弁証法神学の影響の下に示された倫理学的概念である。したがって、この西田の「愛」の概念を哲学的に読み解き、かつそれを九鬼の「運命」の概念と比較考察することによって、申請者がこれまでの研究において示した生の偶然性に基づく実践哲学の展望を、いっそう明晰かつ判明ならしめることが可能であると考えられた。

２．研究の目的

上記「１．研究開始当初の背景」に基づき、申請者は 2 年間の研究期間において、まず西田哲学の全体についての総合的理解を目指すとともに、それを背景として、主として次の 3 点を当初の目的とした。

（1）西田哲学において、偶然性という問題がどのような論理構造のもとに位置づけられ、理解されているか。またそれは、九鬼哲学における偶然性の問題と、どのような異同をもっているかを明らかにする。

（2）論文「私と汝」における「愛」の概念は、特に実践哲学的概念として、どのような論理構造と特長とをもつものであるかを、特に上記（1）で考察された偶然性の問題との関連から、考察する。

（3）上記（1）（2）の成果をふまえ、九鬼の「運命」と西田の「愛」とを比較することにより、各々の人間形成論的意義および問題

点を考察する。

３．研究の方法

九鬼哲学については、拙著『偶然と運命』において、一定程度その全体像およびその人間形成論的意義を示しえたと思われたため、本研究はまず、その成果を背景としながら、西田哲学の全体像を把握することを目指した。平成 27 年度はその作業に専心し、まず西田哲学における偶然性の問題を明らかにし、ついで、その成果をふまえることによって、論文「私と汝」における「愛」の概念の論理構造を解明するという方法をとった。なお、その際、上記「１」の（2）に既述のとおり、西田の「私と汝」の読解には、カール・バルトらのキリスト教神学の影響をも視野に入れた考察が必要であるため、その方面の研究や専門的知識の提供をも同時に進める方法をとった。

４．研究成果

既述のとおり、当初計画では、まず西田哲学の読解に集中的に取り組み、ついで九鬼との比較に進む予定であったが、2016 年 12 月に『現代思想』誌が、2017 年 3 月に『理想』誌が、ともに「九鬼周造特集」を組むこととなり、その双方から論文執筆の依頼があったことから、九鬼と西田の比較そのものを主題とした研究業績は下記（1）にとどまり、その後は、それを背景としつつも、主に九鬼研究のさらなる発展を遂行する結果となった。その研究成果が、下記（2）および（3）である。しかし、その研究成果により、九鬼哲学を歴史哲学として発展的に解釈する新たな可能性が開かれ、それを基礎とした西田との比較に進むことにより、より厚みを帯びた比較研究が可能ではないかとの新たな着想が得られたことも、本研究の重要な成果である。その概要は以下の通りである。

（1）学術論文「「道徳」をめぐる九鬼周造と西田幾多郎（1）:「合目的性」の概念をめぐって」（『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第 67 巻第 1 号、2016 年 8 月）では、九鬼哲学と西田哲学との接点ならびに相違点が明らかにされ、両者を比較研究する際の論点が明確化された。すでに拙著『偶然と運命：九鬼周造の倫理学』（ナカニシヤ出版、2015 年）において明らかにされたように、九鬼の哲学は、時間はいわば無限大の円を描いて無窮に回帰するとする回帰的時間論を基礎としている。これは一面において徹底的な必然性の哲学の立場であり、過去の向けては完全なる因果的必然性の支配を、未来に向けては完全なる目的的必然性の支配を仮定するものである。そうしてその無限の因果系列の起始とされる「原始偶然」とは、円周にあっては円周上のすべての点がその起始であるごとく、回帰的時間を表象する円周上のすべての点、すなわちその都度の「現在」の瞬間を指し示す概念である。かくして、絶対的偶然性としての原始偶然の論理と、絶対的必然性としての回帰的時間の論理とが、相補的に成立するところに、九鬼哲学の最たる特質が看取された。

しかるに、西田にもまた、たとえば「無限の過去から我々を限定する因果的なる時の流というものが考えられ、〔……〕無限の未来から我々を限定する合目的的なる時の流というものが考えられる」（「私と汝」1932 年）といった記述があり、実は西田もその時間論において、九鬼と同じ論理に立脚していると見ることができる。したがってまた、西田が続けて「併し絶対の否定即肯定の立場からは、永遠の今の限定として即ち直観的限定として、自己自身を限定する現在というものが考えられる、現在が現在の中に無限に現在を限定し行くと考えることができる」と述べる「現在」とは、九鬼の言う「原始偶然」と同じ論理構造をもつものであることも明らかとなった。まずここに、従来指摘されることのなかった、九鬼哲学と西田哲学との著しい共通性が示された。

しかしながら、西田がさらに続けて「無限なる時の流と考えられるものは却ってかかる限定の過程的影像と考えることができる」とも述べているように、西田は明らかに、時間の水平的な流れの面を二次的ないし仮象的な「影」と見なし、垂直的な絶対現在をこそ時間の真実在であると考えている。他方、九鬼の場合、原始偶然の論理と回帰的時間の論理とはあくまでも相補的であり、いずれか一方が他方に先立つものではない。ここに、なお慎重な検討を要する両者の差異が見出された。

しかるにこの差異は、特に道徳的実践の論理をいかに基礎づけうるかという問題に関係する。そうして、実はすでにこの問題を指摘していたのが三木清であったことも明らかとなった。三木は、西田哲学は絶対現在の直観的弁証法を重視するあまり、「実践的な時間性の立場」が希薄であり、それゆえに「行為」よりも「観想」に傾いている点に、その弱点がありはしないかと批評している（「西田哲学の性格について:問者に答える」1936 年）。このことから、九鬼哲学を足掛かりに西田哲学を再考していくことにより、西田が示す「愛」の概念を、より実践的な道徳哲学として再解釈しうるのではないかとの展望が示された。

（2）学術論文「「自然支配」と「自然随順」のあいだ：九鬼周造の「自然」概念が問いかけるもの」（『現代思想』第 44 巻第 23 号、青土社、2016 年 12 月）では、九鬼が晩年の論文「日本的性格」（1937 年）等において提示した「自然」概念の再検討がなされた。この研究は、従来、九鬼研究において、単なる国粋主義的言説としてほとんど無視されてきた彼の論文「日本的性格」を、彼の哲学全体

を背景として解釈することにより、その哲学的意義を正当に評価するという研究史的意義をもつものであると同時に、日本の近代思想史においてたびたび提示されて来た、西洋の「自然支配」の思想と日本の「自然随順」の思想とを単に対立的にのみ見る見方に対して、むしろ両者を総合的に見ようとしたところに、九鬼の「自然」概念の独自性ならびにその現代的意義があることを見出したという意味で、文明論的意義をももつものでもあった。

この研究において、特に注目されたのは、九鬼が一見、偶然に生起する自然に逆らわず、ありのままに随順することをよしとする、いわゆる日本的自然観を提示しているようでありながら、他方にあって、自然に逆らい、自己を意志によって道徳的に律するところに人間の人間たるゆえんがあるとする、カント的な「自由」の立場を高唱していることである。このことから、九鬼哲学における「自然」とは、従来の「自由」と「自然」の対立を弁証法的に止揚した、より高次の概念であることが明らかにされた。そうして、それが止揚される際の、いわば媒介となるのが、「習慣」であることも判明した。すなわち、「自由」に基づく道徳的実践が、無窮の反復を通じて「習慣」化したものが、九鬼の言う「自然」である。したがって、真に問われるべき哲学問題は、「自由」か「自然」か、西洋か東洋かではなく、善き「習慣」とは何かである。このことが結論されたとともに、そのためには安易に西洋近代の「自由」の概念を否定するのではなく、むしろそこから（再）出発する必要があること、それが現代の道徳哲学的課題であることも示唆された。

（3）学術論文「日本主義という呪縛：九鬼哲学を解放する」（『理想』第 698 号、理想社、2017 年 3 月）では、上記（2）の研究でも主たる考察の対象となった論文「日本的性格」につき、特に「民族」と「文化」の概念を焦点として新たな考察が差し向けられた。この研究により、従来この論文に下されてきた「日本主義」とか「国粋主義」とかといった評価が覆され、むしろ九鬼は、各々の民族・文化がその独自性を発揮しつつも、異文化に対して根源的に開かれ、多文化が協調する世界をこそ構想していたことが明らかとなった。さらに、この研究によって、九鬼哲学を歴史哲学として解釈し、西田が特に「日本文化の問題」（1940 年）等において示した歴史哲学との比較考察の可能性が開かれた。

従来の九鬼研究において、九鬼は『「いき」の構造』（1930 年）において「閉鎖的な文化的ナショナリズム」への傾きを強め、さらにそれが極まったのが、1937 年の論文「日本的性格」であるとの見方が一般的であった。しかし、本研究によって、①九鬼が『「いき」の構造』において「いき」の他文化との通約可能性を否定したのは、文化的ナショナリズムや文化的特殊主義などとは何の関係もなく、むしろ唯名論的個別主義の徹底という彼の哲学的立場・方法の必然的帰結であったこと、②それゆえ、一方で彼の哲学の立場・方法を高く評価しつつ、他方で民族・文化の固有性に拘る彼の言説が「閉鎖的な文化的ナショナリズム」であるなどとする批判は、単なるイデオロギーでしかないこと、が明らかとなった。そのうえで、さらに、③『「いき」の構造』の時点での彼の個別主義は、他民族・文化との通路をいかなる意味でも否定するという点で、確かに閉鎖的なものであったこと、④しかし、1935 年の『偶然性の問題』における哲学的展開を経て、「日本的性格」では、各々の民族・文化が唯一で固有のものでありながら、なおその根源において開かれた、いわば普遍主義的個別主義ないし個別主義的普遍主義へと発展していること、が論証された。

以上の研究成果から、九鬼は各々の民族・文化がその固有性を発揮しつつ、異文化との根源的な交わりによって、相互が変容しながら発展し行く、きわめて多元的な歴史的世界を構想していたことが明らかとなり、ここに、九鬼哲学を歴史哲学へと発展的に再構成する可能性が見出された。さらに、この九鬼の思想は、「歴史的世界形成の原理は、個別的多と全体的一との矛盾的自己同一として、個別は何処までも個別的なると共に、全体的一として主体は何処までも主体的となる」（「日本文化の問題」1940 年）等とする西田の立場ともきわめて親近的であり、両者の慎重な比較考察の可能性と必要性も、新たに見いだされた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①古川雄嗣、日本主義という呪縛：九鬼哲学を解放する、理想、査読無、no. 698、2017、pp. 129-140

②古川雄嗣、「自然支配」と「自然随順」のあいだ：九鬼周造の「自然」概念が問いかけるもの、現代思想、査読無、vol. 44、no. 23、2016、pp. 148-163

③古川雄嗣、「道徳」をめぐる九鬼周造と西田幾多郎（1）：「合目的性」の概念をめぐって、北海道教育大学紀要（教育科学編）、査読無、vol. 67、no. 1、2016、pp. 81-94、http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8008

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
古川　雄嗣（Furukawa, Yuji）
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号：50758448

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）